

震災を伝え続けて2年
JNN三陸臨時支局奮戦記



2011年6月28日、被災後初めてのカツオ漁船の入港

TBS報道局

政治部長 龍崎 孝

みん
か
ご
ろ
う
民
族
史

題字
中川
順

題字
中川
順

東日本大震災から2年3カ月、現地では今も数々の問題が未解決のまま放置されています。そんな中で取材活動続けるJNN三陸臨時支局のレポートです。

「今年のカツオは早くありませんか、隣のセクシオンから女性記者が声をかけてきた。」

「いつもより2週間は早い気がするけど。小粒かな」、5月23日の朝、昼のJNNニュースの項目案をにらみながら、宮城県・気仙沼にこの日初水揚げされたカツオをめぐってこんなローカルな会話が東京港区のTBS報道局の一角で行き来した。

今は政治部の私も、そして經濟部でアベノミクスの動きを追いかける彼女も、2年前は東日本大震災の発生を受けてJNNが立ち上げた三陸臨時支局の元支局員だった。



カツオの水揚げで
活気づく気仙沼漁港

まだ街の中に被災の爪あとが色濃く残る中、震災から3カ月後の6月、静岡のカツオ漁船が「がん

ばろう気仙沼、がんばろう日本」と連呼しながら気仙沼魚港の仮設岸壁に接岸するのを取材した仲だ。

あの日、私たち東京の記者だけでなく、仙台、名古屋、九州から集ったJNNの記者やカメラマンたちが、復興のさががけとなったカツオの水揚げとそれを迎え入れる市民の表情を日の出とともに一丸となって追いかけたのだった。

思えば震災で打ちのめされた気
仙沼によく笑顔が戻った日だ
ったかもしれない。

気仙沼に日々寝泊りし、毎日のようにミーティングを重ね、支局となったホテルの一室で編集をし、中継カメラの前に立ち続けた、最

近は流行らない表現かもしれないが、こんな「同じ釜の飯」を食べたJNNの仲間がいま、北海道から沖縄まで数百人規模で散らばっている。

駐在記者の発想から支局立ち上げへ

2011年3月11日に発生した東日本大震災はテレビ局の震災報道を考える意味からも、かつてな

い課題を私たちに問いかけた災害だったと思う。

震災報道の最前線にたった被災地の放送局からは、この企画の中でもいくつもの教訓と課題がすでに示されている。

私はこの紙幅の中で、系列局がタッグを組んで震災報道をどう伝えていけばいいのか、という点に絞り、そのひとつの試みとしてのJNN三陸支局の基本的な考え方と展開した活動を報告していきたいと思う。

まず、なぜ私たちはJNNという系列名を冠した支局を作ったのか、ということから始めたい。

それは茨城から青森まで広範囲に及んだ被害の規模を伝えるにあたって従来の被災地局が核となり、系列局やキー局がこれを支援する方式では、いずれ「無理」があらわになるのではないか、と思うところから始まった。

震災が発生した当時、私はTBS報道局政治部のデスクを務めていた。

その日は菅直人首相(当時)への外国人による献金問題が国会で取り上げられていた。

午後2時46分、審議が続く衆議

院の委員会室が揺れ、閣僚たちが天井を見上げるカットを記憶されている方もいるかと思う。

TBSでもそのまま震災特番が始まり、局の全力を挙げて被災地の状況を取材し伝える体制に移行した。当然、政治部も震災対策本部が設けられた政府の対応と刻々とする被災状況の把握に取材の本筋が移った。



南三陸町の防災庁舎と公立志津川病院

そうした動きを報じる生活が10日ほど続いただろうか、果たしてこのまま永田町を視点に震災報道に携わっていくことがいいのだろうか、という疑問がわいてきた。

私はもともと新聞社から記者生活をはじめた経緯がある。駆け出し

のころ、事件や事故の現場で悠々と取材をしていた通信部長とよばれるベテラン記者がいた。

主要な都市に駐在し、自宅に仕事場として地域に密着してネタを報じるベテラン記者の存在、その仕事ぶりに幾度も舌を巻いたものだ。震災からの復興にはどれくらいの年月がかかるか分からない。

JNN系列のキー局としてTBSは何ができるだろうか、と考えたときに被災地の放送局はもちろんのことながら、JNNのキー局としてのTBSとしてもこれを継続的にウォッチし、主体的に伝える努力が必要なのではないか、そんな発想が沸いてきた。報道局の幹部にその考えを伝え、できれば一記者として、新聞社の通信部記者のようにデジカメひとつを武器に被災地に赴任、駐在したい、そんな希望を伝えたのだった。

今から考えれば独りよがりの希望だったと思う。だがその発想はわずか1週間後にはさらに広がり、TBSを核として被災地にJNN全体で運営する放送拠点、臨時支局を立ち上げるという構想に昇華した。

被災ホテルが協力

震災から1カ月たった4月11日、支局開設のため東京を立ち、被災地へ向かった。

それまで映像で見ると限られた被災地の現状を、この目で言葉に失ったのは言うまでもない。

こんな奥までとおもえるような山林地の中まで、津波が押し寄せ、破壊された自動車や崩れた家屋の資材が押し寄せている光景は東京での想像を超えた。そして大船渡や気仙沼の市街に打ち上げられた大型漁船の姿に「この場に来て、自分の目でみなければ被災の現実を理解することはできない」と確信した。

しかし多くの方々がなお避難所で暮らす中で、いったいどこに支局を開設することができるといえるのか。なるべく被災現場に近く、かつ安全で、放送機材を備えるだけのスペースもなくてはならない。当然のことだが、電気は不可欠だ。そんな都合のよい場所が今この事態のさなかにあるのだろうか、と思いながら石巻から南三陸、気仙沼市内へと車でよると被災地の中を進み、そして途方にくれた。

実はひとつの盲点があった。被

災地の放送局各局は三陸の沿岸部に情報カメラを設置している。情報カメラはおおむね見晴らしのよい地点に設置されるのが常だが、宮城県の東北放送の情報カメラのひとつが気仙沼市の海岸部の崖上に立つホテルの屋上に設置されていた。

被災後は停電と遠隔操作のためのNTT回線が切れたため運用できない状況にあったが、その場所を確認しておく必要がある。拠点候補地を探し回って夕闇が迫る中で、とりあえずその情報カメラがどうなったか見ておこうかと、そのホテルに向かったのだった。

ホテルはいまだ電気も通じておらず、水道も復旧していなかった。そうした中で私たちに対応してくれたホテルの女将さんに、突然ではあるが支局を開設するため、ふさわしい場所を探し回っている、と話した。

女将さんは一時的な仕事場を探しているのだらう、私たちが1年は滞在したい、と伝えると「あらまあ」と口を押さえた。あまりに唐突な話だったのだらう。だがしばらくして、被災地で起きていることを全国に知ってもら

ことにつながるのなら、と私たちの突飛とも言える申し出を快諾していただいた。

ホテルには被災した従業員とそのご家族が泊まっていた。さらには体育館などの避難所の生活が長くなったお年寄りや子供がいる家族の受け入れを始めることになっていた。そんな中で私たちを受け入れていただくという決断は、簡単ではなかったろうと今思う。

私たちも必死だったが、自らも被災した中で、広い視野で未知の放送局の受け入れを決めてくれた女将さんがいらつしやらなかったらこの構想は構想のままで終わっていたかもしれない。今も頭が下がる思いだ。



三陸臨時支局内からの中継の準備

客室が「ミニ放送局」に変身

JNN三陸臨時支局は5月の連休をもって気仙沼市のホテルでスタートした。

支局は海に面した客室4室を借り受け、その中に編集室や送出機材を納めた主室、機材などを保管するカメラマン部屋などを振り分けた。

窓からは津波が押し寄せた気仙沼湾を望むことができ、テラスのようにつきだした屋上部分に

中継カメラを据えることによつて、はるか太平洋に面した気仙沼の湾口部を背景に中継することも可能となった。被害の実態を目の当たりにしつ

つ、再び余震があった場合に気仙沼の被災地区がどのような状況にあるのかを生で伝えることが可能となる、まさにうつつのロケーションに支局を設けることができた。

支局からは東北放送が設置していた既存のマイクロ送出施設をベースに、非常用電源を持ち込み、再び停電が起きても波を送り出すことが可能な体制を整えたほか、どのような事態にも対応できるようにとTBSからSNG車一台が

常駐することになった。

SNG車はそれからおよそ一年、被災地の沿岸部を縦横に走りまわつて、昼のニュースやイブニングニュース、さらには月一回、定例化した『ニュース23クロス』（現『ニュース23』の現地リポートを中継し続けた。その走行距離、さらには中継回数を考えると、おそらくは「一生分の仕事」をここで稼いだのではないかと思う。



被災の爪痕深い
気仙沼市内からの中継

JNN系列の場合、東日本大震災の震災報道を進めるにあたって、おおむね「ゾーンディフェンス」を敷くことによつて対応した。例えば岩手県内の被害を伝えたのは、被災地の岩手放送を核とし、そこにHBCとCBCの基幹局を振り分け、さらに系列の局が加わるというローテーションを組んだ。

一方宮城県では東北放送を核に

MBSとRKBが加わる布陣となり、TBSは福島を責任範囲とした。もちろんキー局としてのTBSは福島のみならず、仙台、盛岡にもカメラクルーや記者を送り込んで支援体制を組んだ。そのうえで別働隊として出来上がったのがJNN三陸臨時支局というわけだ。先に述べた放送機能を持っていることも踏まえ、盛岡、仙台、福島の3放送局とは別の、ミニ放送局が被災沿岸部に出来上がったと書いたゆえんだ。

もともとフアシリティーだけが優れていても、それを運用するマンパワーが伴っていなければ放送が継続できないことはいうまでもない。支局にはTBSから支局長、カメラデスク(1年間通して常駐)、編集マンと1クルー(1ヵ月交代)が赴任し、デスクには地元のTBCから本社のデスク、県警・県政キャップクラスのベテランを3ヵ月交代でいただいた。それに加えて地元TBCから1クルー、JNN系列の各局からはHBC、CBC、MBS、RKBの基幹4局が1ヵ月交代で1クルーを派遣していただいた。そのほかのJNN20局からも2週間交代で1クルー、

計4クルーを支局に常駐させる形で運用が始まった。

またSNG車の運行もJNN全局が参加し、2週間交代で持回ることになった。まさにJNNの総力を挙げて、JNN三陸臨時支局にそのマンパワーを供出したのだった。



海水浴の名所・大谷海岸も
すべての松を失った

「命を守る」放送をしよう

支局のスタッフは2週間から1ヵ月で交代するというのは、実はあまり効率がいい話ではない。

初めて被災地に入る女性記者もいる。それぞれがここで何ができるのか不安を抱えながらの「赴任」となる。2週間も、1ヵ月もやれるのだろうか。初めはそんな不安

を抱えながら支局にやってくるが、しばらくすればそれも杞憂になる。みな被災地の人々の力強さと優しさに触れながら、たくましいレポートをまとめてくるようになる。まさに「現場」が記者を鍛えるのだ。

だが、そんな風に思えるようになったころには、発局に帰任しなければならぬ。気仙沼で目をさまし、空気を吸い、取材し、酒を飲み、眠る。24時間被災した三陸のことを考え続けながら過ごす。そんな腰を据えた取材生活が続けることでようやく見えてきたものがある、と気付いた時にはもう帰らねばならない。被災地の暮らしは正直辛い。もつと残って伝えてほしいと思うJNNの記者が幾人もいたことか。だが引き止めるわけにもいかない。そしてJNNの若い記者たちが自分の局に帰任の日、また新しい記者が日本のどこから駆けつけてくる。

新しいスタッフが「赴任」するとまず、支局のあるホテルの屋上に連れて行って、津波の爪痕が残る気仙沼市内を指でさしながら、被害の大きさと、いざという時の避難ルートを説明することになる。

そして何より、余震が発生し、津波のおそれがある場合にはいち早く中継を立ち上げ、まず気仙沼をはじめとする三陸の人々に避難を呼びかけること、これが被災地に支局を設けたJNNの使命だ、と話すことにしていた。

万が一の場合、ネット放送をしている以上、日本全国に津波の被害を伝えることは言うまでもない。だが真っ先にしなければいけないのは最前線にいる私たちが、最前線で命の危険にさらされている



気仙沼・大川に翻った主な大漁旗

人々の命を守る放送をすることではないのか。それがこの厳しい環境下で私たちがよそ者の滞在を認めてくれた被災地の人たちへお返しできることではないか。

安全地帯にいる視聴者の方々へ伝えるのは、そのあとでいい、その姿勢を支局員の基本としたのだった。

もちろん、なにもしないでいざというときに「命を守る放送」ができるわけではない。JNN三陸臨時支局では昼のJNNニュースでほぼ毎日のように被災地から中継を行うことで、被災地の隅から隅まで被害状況が把握できるほか、いざというとき安全に中継を行うことができる場所を「下見」する意味もあった。もちろん中継中に地震があった場合、すぐに撤収できるような、駐車時の車の向きまで考えた。また夕方にはこれもほぼ毎日のように、三陸臨時支局からTBC（東北放送）のローカルワイドニュースに向けて中継を行った。これも「訓練」の一環と位置づけ、中継カメラはJNN全局から赴任したクルーが日替わりで対応し、中継レポーターもTBCの記者ではなく、JNNの記者がたびたび出演することにした。いつでも誰でも特番中継に対応する、そんなOJTを日々重ねたのだった。

何を伝えることができたのか

支局では北は岩手県久慈から南は宮城県岩沼周辺まで、県ごとの放送エリアを超えて、取材しニュースを出してきた。私たちのSNG車が翌日昼の中継のため久慈市内のホテルに一晚駐車した時には、それを垣間見た市民からホテルに「三陸支局が久慈に移ったのですか」という問い合わせもあったとホテルの方から聞いた。



釜石港に打ち上げられた大型貨物船

三陸支局は従来の放送局の「枠」を超えて取材し、放送を続けてきた。支局開設直後から始まったJNN昼ニュースでの記者報告「復興の日々」は3年目を迎えた今240回を超え今も続いている。私は民放ニュースの歴史の中で

顧みても、誇るべきことだとひそかに思っている。さらには支局のSNG車を使って、派遣されてきた記者の出身局のローカルワイドニュース向けの中継なども試みた。被災地から西日本の放送局のローカルニュースに直接波を受けて記者の中継が行われたのも、JNN臨時支局ならではの活動だった。

系列の「絆」を深める試みだった。そのほか気仙沼から全枠放送した『サンデーモーニング』や毎月1回、膳場貴子キャスターが被災地を取材し、生中継で報告を続けた『ニュース23』など、支局の機能を十分に活用してくれた番組の協力もあって、三陸支局はいま3年目を迎えてなお、活動を継続している。

支局ができてしばらくしたころ、TBS報道局のある人から「支局ができたのだからギャラクシー賞を取るような作品を出してほしい」と語りかけられたことがある。

私は即座に「そんなためにこの支局があるのではない」と言葉を返した。すぐれた作品は作れる人が作ればいい。そんな賞に値するような優れた題材にもならないような、小さく埋もれた、しかし確

実に変化をしている被災地の姿を丹念に拾い、確かに伝えていくことがこの支局と、ここに赴任した記者の使命だと。

すでにいい歳になった私だが、50歳を超えたいま、あの被災地をとりまいた「匂い」と泥や水の記憶が、日々の仕事の原点になっている。あの中で人々は耐えて生き、その現場に私がいたことは正しい選択だったと思っている。そしてその思いがJNNの若い記者たちの記憶に刻まれ続けてくれれば、支局開設の意味はある。

支局から出したニュースが作品として立派な賞をいただいたことはない。ただ昨年6月、放送文化基金から支局の地道な活動が評価され、第38回放送文化基金賞を頂くことになった。受賞の理由には「東日本大震災の被災地に開設した民放ニュースネットワーク初の臨時支局での持続的な放送活動」と書かれている。まさにJNN三陸臨時支局のすべてがその言葉に凝縮されている。

伝え続けること、ささやかながらそれがジャーナリズムの基本だと確信している。

【資料提供】TBS